

母子関係と子どもの発達に関する比較文化的研究

—日本と米国—

大瀧 ミドリ

(昭和57年9月30日受理)

The Cross-Cultural Study of Mother-Child Interaction and Child Development

—Japan and United States—

Midori OTAKI

(Received September 30, 1982)

はじめに

発達研究においては、人間を有機的な存在としてとらえ、各々の領域の発達が、相互にどのように有機的に機能しながら、総体としての個人の発達を形づくっているか、そのメカニズムを明らかにする必要がある。そのための研究方法の開発もまた必要である。

そこで本研究においては、子どもの発達を複数の発達領域の関連の中でとらえることにより、総体としての子ども理解についての知見を得たいと考えている。

また、日米間の子どもの発達を対比することによって、発達にかかわる社会的、文化的環境要因の意味についても考える。

Ainsworth, Baunrind and Black, Lewis and Goldberg 等は、子どもにかかわる母親の養育態度が、子どもが母親との間に形成する情緒的な結びつきである愛着と関連があることを指摘している。また、Ainsworth, Bell, Belyey and Schaefer, Connell, Rubenstein, Sroufe, Yarrow 等による多くの研究においては、主たる養育者である母親に対する愛着の質的特性と子どもの認知的発達が関連することを明らかにしている。

このような結果から、本研究では、子どものおかれている物理的、社会的養育環境、母親の養育態度、子どもの認知的発達の指標としてのコンピテンスの発達、母親との情緒的な結びつきをみる指標としての愛着、これらの四要因が相互に有意な関連をもつことを仮定している。

そこで、一才児とその母親を研究対象として、自然な家庭場面での母子関係と実験的な場面での母子関係を通して、上記の仮定の検証を試みる。さらに、米国の結果児童学科

(既報)と比較することにより、母子関係について cross-cultural な研究を行なう。

なお、本研究の被験者は、対象児が生後3ヶ月の時に研究を開始した一連の研究の参加者と同一である。

研究方法

被験者：本研究の被験者は、都内およびその近郊に在住する12ヶ月児(土2週間)43名(男児27名、女児16名)とその母親43名である。被験者は、すべて第一子である。

被験者は、都内の3ヶ所の保健所(大規模団地を所轄内にもつもの、大規模商店街を所轄内にもつもの、小規模商店街および工場を所轄内にもつものとその地域の特性はそれぞれ異なっている。)の3ヶ月検診受診対象者名簿から研究条件を満たしている家庭に、研究協力依頼をしたものである。依頼方法は2ヶ所の保健所では、郵送による方法を取り、他の保健所では、母親に直接口頭で依頼したものである。

なお、郵送依頼によって研究協力を得た比率は非常に低く、約12%である(185家庭に依頼し、22家庭から諾の返事を得る)。また、口頭依頼によって研究協力を得た比率は約57%である(42家庭に依頼し、24家庭から諾の返事を得る)。さらに、郵送依頼の協力者から直接紹介を受けた家庭が、7家庭ある、その7家庭からは全て協力を得ている。

しかし、本研究を行なう時点では、引越し、その他の理由により協力家庭は43家庭に減少している。

手続：養育環境の調査には、HOME (Home Observation for Measurement of the Environment) を使用し、母親の養育態度の測定には、Ainsworth Scale を使

用する。また、子どものコンピテンスの測度としては、Bell and Pairs テストを用いる。さらに、子どもが母親に対して形成している愛着の質的側面を測る方法として、Ainsworth らによる Strange Situation を用いる。

これらの測度は、約 2 時間半に亘る家庭訪問と約 30 分間の Strang Situation における行動観察、面接およびテストによって施行する。

なお、これらの手続の詳細については、すでに報告したので、本報告では省略する。

結果および考察

I 各測度について

1. HOME (Home Observation for Measurement of the Environment): この測度は、子どもが生活空間の中で、実際に体験する物理的、社会的環境状況についてみるものである。

TABLE 1 に示されるように、総得点の分布幅は 21～40 である。この結果を米国のものと比較すると、分布幅には大差は認められない。しかし、分布の上限值と下限値についてみると、下限値における日米差が大きい。すなわち、日本の下限値は、米国のものよりも比較的低い値を示している。

つぎに、各下位尺度についてみる。比較的分布幅が大きいものは、1 (Emotional and Verbal Responsivity of

Mother), 4 (Provision of Appropriate Play Materials), 5 (Maternal Involvement with Child) である。下位尺度 4 の分布幅は、米国においても比較的大きいものである。しかし、他の尺度 (1 と 5) は、米国においては分布幅の小さい尺度である。米国で分布幅の大きい下位尺度は、2 (Avoidance of Restriction and Painshment) および 6 (Opportunities for Variety in Daily Stimulation) である。

日米において家庭差が認められる養育環境条件は、異なっていることをこの結果は示している。

つぎに、各下位尺度の平均得点について日米の比較を行なう。

日米間に有意な差 ($p < 0.001$) が認められるものは、HOME の総得点、下位尺度 1, 3 (Organization of Physical and Temporal Environment), 4, 5 である。これらの平均得点は、いずれも米国の方が高い得点を示している。具体的にどのような質問項目で、日米差が顕著であるかをみるために、各質問項目で “yes” と評定されたものの頻度と比率をみたのが TABLE 2 である。

下位尺度 1 は、主に母親から子どもへの言語的な働きかけについてみるものである。日米差が認められる質問項目は 3, 7, 8, 10 である。最も差が大きい項目は、10 である。これは、子どもが母親から身体的接触をとまなう働きかけを受けたか否かを見るものである。具体的な

TABLE 1
SAMPLE MEANS AND STANDARD DEVIATIONS
FOR THE HOME MEASURES (N=43)

Measure	Possible Range	Actual Range	Sample Mean	Standard Deviation
HOME subscale 1	0 - 11	4 - 11	8.8	1.2
subscale 2	0 - 8	4 - 8	5.9	1.1
subscale 3	0 - 6	3 - 6	5.0	0.7
subscale 4	0 - 9	2 - 9	5.9	1.7
subscale 5	0 - 6	0 - 6	4.7	1.5
subscale 6	0 - 5	1 - 5	3.3	1.1
total	0 - 45	21 - 40	33.6	4.3
Ainsworth scale 1	1 - 9	3 - 9	8.4	1.3
scale 2	1 - 9	5 - 9	8.4	1.1
scale 3	1 - 9	5 - 9	8.2	1.3
scale 4	1 - 9	3 - 9	8.5	1.3
Bell test	0 - 600	35 - 600	374.2	171.4
Pairs test	0 - 600	-36 - 510	274.4	108.7

TABLE 2
FREQUENCY AND PERCENTAGE OF SUBQUESTION OF HOME

HOME	Japan (N=43) N (%)	America (N=41) N (%)	HOME	Japan (N=43) N(%)	America (N=41) N (%)	HOME	Japan (N=43) N (%)	America (N=41) N(%)		
Subscale 1			16	39(90.7)	31(75.6)	31	43(100.0)	41(100.0)		
1	42(97.7)	41(100.0)	17	36(83.7)	26(63.4)	32	18(41.9)	40(97.6)		
2	40(93.0)	40(97.6)	18	31(72.1)	41(100.0)	33	30(69.8)	40(97.6)		
3	22(51.2)	38(92.7)	19	5(11.6)	24(58.5)	34	24(55.8)	38(92.7)		
4	42(97.7)	41(100.0)	Subscale 3			Subscale 5				
5	36(83.7)	41(100.0)		20	34(79.1)		31(75.6)	35	32(74.4)	35(85.4)
6	43(100.0)	41(100.0)		21	41(95.3)		36(87.8)	36	32(74.4)	41(100.0)
7	31(72.1)	40(97.6)		22	43(100.0)		39(95.1)	37	28(65.1)	41(100.0)
8	30(69.8)	41(100.0)		23	16(37.2)		40(97.6)	38	33(76.7)	38(92.7)
9	43(100.0)	41(100.0)	24	38(88.4)	41(100.0)	39	39(90.7)	39(95.1)		
10	8(18.6)	39(95.1)	25	42(97.7)	41(100.0)	40	36(83.7)	39(95.1)		
11	43(100.0)	41(100.0)	Subscale 4			Subscale 6				
Subscale 2				26	4(9.3)		40(97.6)	41	26(60.5)	34(82.9)
	12	41(95.3)		27	34(79.1)		35(85.4)	42	20(46.5)	19(46.3)
	13	43(100.0)		28	33(76.7)		41(100.0)	43	29(67.4)	22(53.7)
	14	38(88.4)		29	27(62.8)		38(92.7)	44	37(86.0)	30(73.2)
	15	19(44.2)	23(56.1)	30	38(88.4)	41(100.0)	45	32(74.7)	34(82.9)	

母親の行動としては、“ほほずり”“キス”“撫でる”などである。このような行動の頻度が日本の母親に低いのは、日米における対人関係の表現方法における文化差が影響しているものといえよう。

質問項目3は、子どもにものの名前などを母親の方から意図的に教えるものの比率を示している。日本の比率は、米国の約半分とかなり低い比率を示している。しかしながら、同じく母親からなされる無意図的な言語的働きかけ、および子どもの発話に対する応答的な言語的働きかけについてみる質問項目1および2の比率には差は認められない。このことは、子どもが母親から受ける言語的刺激量については、日米に差は認められないが、話しかけられる内容に差異のあることを示している。すなわち、日本の母親の言語的働きかけの多くは、自然発生的な働きかけであるのに対して、米国の母親の働きかけは、自然発生的な働きかけに加えて、意図的な働きかけが多く含まれている。

このような日米間の母親の言語行動の差異は、約20年前の1961～1964年に行なわれた Caudill らの結果とは、非常に違っている。Caudill らの結果は、日本の母親が子どもに話しかける頻度そのものが、米国の母親と比較して顕著に低いことを示している。しかし、1979年に、Caudill らの研究方法に準拠して行なった筆者の研究で

は、母親からなされる言語的働きかけの量的面においては、Caudill らが指摘した日米差は、見いだされない。これは、千石の結果とも一致するものである。

このような日本の母親の言語的働きかけの量的増加は、子どもの発達における言語的働きかけの重要性を強調する、アメリカ式養育方法の影響によるものと思われる。しかしながら、教育観など価値を反映する内容面においては、依然として、日米差が大きいといえる。

質問項目8は、観察者に対して自分の子どものことを自慢げに話すものの比率をみるものである。米国の母親の全員が、子どものことについて誇らしげに語るのに対して、日本の母親の比率は低い。しかし、観察者が、子どものことについて誉めた場合には、日本のすべての母親は、非常にうれしそうな表情をする(質問項目9で扱われる内容)。すなわち、日本の母親も心情的には、自分の子どものことを誇りたい気持を多分に持っていることが推察される。このような日米差は、その気持が表現されるか否かにおける差異であり、やはり、伝達文化における価値観の違いに起因しているものといえよう。

下位尺度2は、子どもの行動を抑制したり、制限を加えたりせず、子どもに自由な行動を許すものの比率をみるものである。

質問項目16と17のいずれも日本の母親の方が、米国の

母親よりも高い比率を示している。これらは、子どもに対して批判的な言葉かけや子どものやっている行動を中止させるというような接し方が、日本の母親には少ないことを示している。

米国の母親の態度には、先にみたような子どもに対してポジティブな面とここで見られるようなネガティブな面と全く対照的なものが顕在していることが特徴といえよう。日本の母親の態度にはこのような対照性は認められない。

質問項目15は、体罰を使用しないものの比率を示している。日本の母親の場合、体罰の使用は、“口でいってもわからないから、今は使用する”というように条件づきで使っているものが多い。

質問項目19は、日米いずれにおいても低い比率を示している。これは、家庭内でのペットの飼育率を見るものである。ペットの飼育と行動の制限との関連をみるのは、一見、奇妙に思われるが、これは、ペットを飼っていると、ペットとの関係で子どもの行動に制限が加えられる頻度が増すという理由による。

日本の被験者の多くは、団地もしくは民間の高層住宅に在住している。これらの人々は、在住の条件としてペットを飼うことが禁止されている。このような住宅事情が、この項目における日米差を生じさせている。

下位尺度3は、子どもが生活する場所における空間的な広がりや変化性についてみるものである。家庭外のいろいろな場所に連れだしてもらえる子どもはこの尺度の得点が高くなる。

質問項目23は、米国に比較すると日本の比率は非常に低い。これは、月1回の健康診断を受けているものの比率をみるものである。米国の一才児のほとんどは、予防の意味で月1回の健康診断を受けている。一方、日本の一才児は、保健所で定期的に制度として行なわれる健康診断は受けているが、予防的観点から自主的に健康診断を受けているものは皆無である。日本の比率の内実は、予防的な意味合から医院を訪れたものではなく、治療の意味で訪れたものの比率である。

この比率の差異は、日米間における健康に対する観念の違いおよび医療制度の違いに起因するものといえよう。

下位尺度4、これは、子どもに与えられている玩具の種類についてみるものである。

質問項目26は、ブランコなどの大型運動遊具が与えられているものの比率を示している。日本の場合は、住宅

専用空間の狭さなどの住宅事情が関与して、このような大型遊具をもつものは非常に少ない。しかし、近所の公園には設置されているため、子どもの生活体験としてはこれら大型遊具を使用する経験をもっている。それ故、体験という側面から見れば、TABLE 2 に示されるような日米差はなくなるものと考えられる。

しかしながら、日本の子どもが与えられている玩具の種類は、米国の子どもに比較して少ない（質問項目 28, 32, 33, 34）。

質問項目29は、訪問中に、母親の方から積極的に子どもに働きかける遊びが認められた比率を示している。日本の比率は低い。家庭訪問では、できるだけ自然な状況での母子関係を見たいと考え、母親には、母親の行動が観察対象になっていることは告げてない。しかし、母親にとって見られている意識はかなり強く働いていたのではないと思われる。また、何人かの母親は、観察対象が子どもであるという認識から、意識的に子どもにかかわることを控えていると思われるものもある。さらに、観察者との対話に多くの時間を費すものもある。このように、“いつものように”と依頼してあったにもかかわらず、観察者の存在によって、母親の対子関係は、かなり日常的でなくなっていたように思われる。特にこの傾向は日本の母親に強い。このような母親の傾向が、日米差を生みだしているとともに、先に質問項目8で指摘した対他者関係のあり方の違いによるものと思われる。

下位尺度5、これは母親が子どもにどうかかわるか、母親の initiative についてみるものである。

質問項目37と38は、いずれも意図的に子どもの発達を促そうとする母親の行動についてみるものである。日本の母親の比率は、いずれも米国の母親よりも低い。玩具を与える時の日米の母親の行動を比較するとつぎのようになる。

米国の母親の場合にはまず玩具の使い方を教え、玩具を手渡す場合には直接手渡すよりもむしろちょっと離れた所に玩具を置いて、子どもが玩具を手に入れるため必ず子ども自身の活動がともなうようにする。一方、日本の母親の場合は玩具の扱いは子どもの自由にまかせ、与える場合は直接手渡す。つまり、米国の母親は、子どもとの関係において非常に意図的にふるまうのに対して、日本の母親は、子どもに合わせて行動するというように、日米両国の母親の態度には、非常に明白な差異が認められる。これは、両国の母親のもつ発達観の差異に起因す

るものと思われる。

下位尺度6, これは, 子どもの対人的環境の変化性についてみるものである。

質問項目41は, 毎日の生活における父親の育児参加についてみるものである。父親の育児参加の比率は, 米国の方が高い。日本の父親の場合, “日曜日には”あるいは“早く帰って来た時には”というように条件つきでの育児参加は非常に高い比率を示す。しかし, 毎日, きまった育児行為に対して父親が責任をもつという形式での育児参加率は低い。これは, 父親の意志に反して, 毎日の生活の中では, 勤務形態・通勤時間など時間的制約が多いために, 結果として, 父親の育児参加の率を低くさせているもののように思われる。

今まで見て来たように, 日本と米国の一才児のおかれている養育環境には, 多くの差異が認められる。その違いは, 日米における価値観に根ざしているものと単に生活形態の違いによるものとがある。

2. Ainsworth Scale: これは, 母親の養育態度を評定する尺度である。TABLE 1 に示されるように, 得点の分布幅は, 尺度1 (Sensitivity-insensitivity) および4 (Accessibility-ignoring) が他の2 (Acceptance-rejection) および3 (Cooperation-interference) よりも大きい。このような傾向は, 米国においても見いだされている。

各尺度の平均得点についてみると, 日米間に有意差が認められる尺度は3である。この尺度の得点は, 日本の母親の方が高い得点を示している ($p < 0.05$)。この尺度は, 子どもが自らやろうとしたことに対して, 母親ができるだけ干渉せずに, 子どもの意志をどの程度認めうるかについて評定するものである。この尺度で高い評定を受ける母親は, 子どもに対してある方向づけをしなければならない状況にあっても, 決してストレートに方向づけを指示することはしない。むしろ, その場を整えることで, 子ども自身が自然に, その方向に向くような雰囲気づくりに気を使う。このような間接的な方向づけの態度は, 米国の母親に比較して, 日本の母親に多く認められるものである。このような日本の母親の態度は先にHOMEの質問項目16および17で見いだされたものと同じものである。

ここで見いだされた日本と米国の母親の態度の基本的な違いについては, 三宅らおよび東らの結果でも見いだされている。三宅らは, 母子間のコミュニケーションスタイルにおける日米間の交差文化的な研究において「日

本の母は, アメリカの母に比べると, 子の誤りに対して, フィードバックせず, 否定語を多く使わない……いわゆる子中心ともいえるべき側面を持ったコミュニケーションスタイルである (p 81).」と指摘している。また東らは, 日米の母子関係に関する研究において「……米国の, 母親の主導性の強い具体的で直接的な統制に対して, 日本の, 子どもの側の自由度を大きくとった間接的誘導的及び環境整備ともいえるべきやり方の対照がクローズアップされた (p 301).」と指摘している。

三宅らおよび東らの被験児の年齢は3才8ヶ月～6才0ヶ月で, 本研究の被験児の年齢よりも高い。しかし, 日米の母親の態度の差異は, 対象年齢を越えて共通に存在しているものといえよう。

また, 男児をもつ母親における日米差および女児をもつ母親における日米差について検討した所, 男児をもつ母親において尺度3に有意な日米差が見いだされている ($p < 0.05$)。男児をもつ日本の母親は, 男児をもつ米国の母親に比較して, より間接的方向づけをとっていることを示している。しかし, 女児に対してこのような日米差は認められない。このことは, 男児対母親の関係のあり方がもつ文化的, 社会的意味が, 日米において異なっていることを示しているものといえよう。

なお, 日本における男女児をもつ母親の態度の間にも, 米国における男女児をもつ母親の態度の間にも有意な差異は認められない。

3. Bell and Pairs テスト: <Bell テスト> Bell テストの得点は, 10分間 (600秒間) に亘る Bell の呈示時間内に, Bell に直接触れた時間 (秒) の総計をもって示される。TABLE 1 に示されるように, 被験児の Bell の触時間の分布は, 35秒から600秒と非常に広い範囲に亘っている。米国の場合は, 0秒から558秒であり, 日米の結果は, 比較的類似した傾向を示している。しかし, 日米の分布曲線の歪度には, 違いが認められる。日本の場合には, 被験児の約47%のものが400秒以上の時間帯に分布している。一方, 米国の場合には, 約70%のものが400秒以上のところに分布している。すなわち, 米国の分布曲線は, 日本のものに比べてかなり右寄りとなっている。

つぎに平均得点についてみる。日本の平均は, 374.2であり, 米国の平均は, 441.7である。米国の得点は, 日本のものに比較してやや高い傾向が認められる ($p < 0.1$)。

＜Pairs テスト＞ Bell テストで使用した Bell と 10 種類の novel object をそれぞれ 1 分間、計 10 分間（600秒間）対呈示する。そして、10種類のnovel object に触れた総時間からすでに子どもにとって familiar object となっている Bell に触れた総時間を差し引いた時間が、Pairs テストの得点とされる。novel object に触れた総時間よりも familiar object である Bell に触れた時間が長い場合には、Pairs テストの得点は、マイナス得点となる。

TABLE 1 に示されるように、得点分布は、-36 秒から 510 秒である。米国の得点分布は、43 秒から488秒であり、日本のものより、多少狭くなっている。

平均得点についてみると、日本は 274.4 であるのに対して、米国は 336.6 と、日本の得点よりも有意に高い得点を示している ($p<0.01$)。米国の一才児は、新奇性の高い novel object に対して強い興味・関心を示し、探索行動が、日本の一才児に比較して非常に活発であるといえる。

つぎに、男女児別に日米差についてみる。いずれにおいても 5%水準で、日米差は認められない。しかし、一般的傾向として、男女児ともに米国の方が高い傾向は認められる ($p<0.1$)。

4. 友達と遊ぶ経験：ここでは、友達と遊ぶ経験の有無をつぎのように 5 段階に評定する。

- めったに友達と遊ぶ機会がないもの：1
- 月に数回遊ぶもの：2
- 週に 1 回程度遊ぶもの：3
- 週に数回遊ぶもの：4
- ほとんど毎日遊ぶもの：5

日米間には、有意な差は認められない。しかし、男女児別に日米間の差異をみると、男児の場合には、米国の

男児の方が、日本の男児よりも多くの友達経験をもって いる ($p<0.05$)。女兒については、このような日米差は認められない。

5. 愛着の形成：この測度は、子どもが、主たる養育者である母親にどのような愛着を形成しているかについてみるものである。この測度では、実験的に短い母子分離を経験した後、子どもが母親に再会した時、子どもがとるつぎの 5 つの行動について評定する。

Proximity seeking

Contact maintaining

Proximity and interaction avoiding

Contact resisting

Distance interaction

これら 5 つの行動について評定した結果に基づいて、子どもが母親に対して形成している愛着の質的面についてみる。愛着の質的な違いによって子どもは 3 group, 8 subgroup に分類される。

A groupの子どもは、Avoidant baby と呼ばれ、この group の内には、A₁ と A₂ の subgroup が含まれている。

B group の子どもは、Secure baby と呼ばれ、この group の内には、B₁, B₂, B₃, B₄ の subgroup が含まれている。

C group の子どもは、Ambivalent baby と呼ばれ、この group の内には、C₁ と C₂ の subgroup が含まれている。

分類の信頼性をみるために、2 人の評定者が独立に評定する。分類した結果の一致度は、3 group については 90.9%であり、subgroup については 78.8% である。

TABLE 3 の Regroup とは Connell の分類基準に基

TABLE 3 STRANGE SITUATION CLASSIFICATIONS (N=40)

Subcategories	Number N (%)	Major Classification N (%)	Regrouping N (%)
A1	5(12.5)	6(15.0)	9(22.5)
A2	1(2.5)		
B1	3(7.5)	27(67.5)	14(35.0)
B2	2(5.0)		
B3	12(30.0)		
B4	10(25.0)		
C1	4(10.0)	7(17.5)	17(42.5)
C2	3(7.5)		

づいて、再分類したものである。Connell は、subgroup B₁ に分類されるものは、行動的には group A に分類されるものと類似しており、また subgroup B₄ に分類されるものは、行動的には group C に分類されるものに類似している。それ故、Regroup という新しい分類基準を使用することを提唱している。Regroup 1 とは、subgroup A₁, A₂, B₁ を含む。Regroup 2 とは、subgroup B₂ と B₃ を含む。Regroup 3 とは、subgroup B₄, C₁, C₂ を含む。

本研究では、前者の Ainsworth らの分類と後者の Connell の分類の 2 つを用いて検討を進める。

TABLE 3 は、各 group の比率を示している。

米国の各 group の比率をみると、A=17.9%, B=64.1%, C=17.9% である。日米の結果は非常に類似している。Regroup の比率についてみると、米国の比率は、1=30.8%, 2=35.9%, 3=33.3% であり、3 group はほぼ同率を示している。日本の場合は TABLE 3 に示されるように、Regroup 3 の比率が他の 2 つの Regroup よりも高い。また各 Regroup について日米差をみると、米国の Regroup 1 の比率は、日本よりも高く、日本の Regroup 3 の比率は、米国のものよりも高い。

つまり、日本の子どもは、母親に対して Ambivalent な愛着を形成しているものが多い。一方、米国の子どもは、母親に対して Avoidant な関係を形成しているものが多いといえる。

このような愛着形成における日米差は、愛着の形成に関与する他の要因との間に、どのような差異を生じているのであろうか。各測度との関連について検討するなかで見ることにする。

II 愛着の形成と他の要因との関連

1. 愛着と母親の養育態度：TABLE 4 は、母親の養育態度の測度である Ainsworth Scale の得点を各 group 別に示したものである。

TABLE 4 に示されるように、各 group 間には有意差は認められない。有意差は認められないものの、尺度 3 の得点についてみると、C>B>A の傾向がうかがえる。

一方、米国の結果では、Regroup 3 に分類される母親は尺度 4 の得点が高い。他の Regroup の母親に比較して有意に低いことを見いだしている。すなわち、Regroup 3 に分類された子どもの母親は、子どもへの関心が他の Regroup に分類された子どもの母親よりも低い。そのために、子どもの発する signal や communication に対する反応が明らかに遅い傾向をもっている。

母親に対する愛着の形成は、母子関係を通して結果するものである。その愛着の形成に関与する母親の養育態度が日米において違うということは、先にみたような日米間の価値観の違いが、母親の養育態度に違いをきたすというような単純なものではないことを示唆している。むしろ、母子関係にともなって生じる子どもの情緒的な体験の意味そのものを文化的、社会的 context の中で考えて行く必要性を示唆しているものといえる。

2. 愛着と養育環境：Ainsworth, Connell, Goldberg 等の指摘にもあるように、子どもがどのような物理的、社会的環境で生活しているかということは、母子関係のあり方を大きく制約することが考えられる。そこで、愛着と養育環境の測度である HOME との関連についてみる。

TABLE 5 に示されるように、HOME の総得点および下位尺度の得点は、group 間に有意差を生じさせていない。5%水準で有意差は認められないが、下位尺度 3 では、C>B>A (Regroup 2>3>1) および 4 では、B>C>A の傾向がうかがえる。

米国の結果でも、やはり group 各間には有意差は見いだされていない。いずれの group の得点も高く、本研究対象の養育環境の測度として、HOME の有効性を考える必要がある。

TABLE 4 ATTACHMENT CLASSIFICATION AND MEAN AINSWORTH SCALE SCORES (N=40)

Scale	Attachment Group Mean			F	Regroup Mean			F
	A	B	C		1	2	3	
1	8.7	8.4	8.7	.36	8.8	8.3	8.5	.69
2	8.3	8.3	9.0	1.05	8.6	8.1	8.6	.84
3	7.7	8.2	9.0	2.03	7.7	8.3	8.5	1.43
4	8.0	8.6	9.0	1.60	8.3	8.6	8.8	.51

TABLE 5 ATTACHMENT CLASSIFICATION AND HOME SCORES (N=40)

HOME Score	Attachment Classification				Regrouping			
Subscale	Group Mean			F	Group Mean			F
	A	B	C		1	2	3	
1	8.7	8.9	9.0	.13	8.8	9.1	8.8	.40
2	5.8	5.7	6.3	.70	5.7	5.6	6.1	.60
3	4.5	5.1	5.3	2.16	4.7	5.3	5.0	2.08
4	4.8	6.3	5.9	2.06	5.6	6.1	6.1	.39
5	4.8	4.8	5.0	.09	4.7	5.0	4.7	.28
6	2.8	3.4	3.9	1.57	3.2	3.4	3.5	.16
Total	31.5	34.1	35.3	1.63	32.6	34.6	34.1	.74

TABLE 6 ATTACHMENT CLASSIFICATION, BELL AND PAIRS SCORES (N=40)

Test	Attachment Group Mean			F	Regroup Mean			F
	A	B	C		1	2	3	
Bell	516.5	339.9	379.6	2.94	409.3	416.4	333.5	1.03
Pairs	277.5	292.8	223.6	1.07	289.6	298.6	255.8	.61

3. 愛着とコンピテンス：TABLE 6 は、各 group の Bell テストと Pairs テストの結果を示したものである。

Bell テストの得点についてみると、5%水準では有意差は認められないものの、group A の得点は、他の group のものよりも高い傾向が認められる。Rubenstein によると Bell テストの得点の高いものは、探索行動が活発であるという。確かに、Strange Situation における group A の子どもの玩具への興味の強さや空間移動のスムーズさは、他 group のものに比較してより優れている。group A のこの行動傾向は、Rubenstein の指摘と一致するものといえよう。

米国の結果と比較すると、日本の group A の得点の方が米国のものよりも高く、日本の group A に分類される子どもは、より活動的であるといえる。しかしながら、他の group のものについては、有意な日米差は認められない。

Pairs テストにおける group 差は有意でない。しかし、group C および Regroup 3 に分類されるものの得点は、他の group のものよりも低い傾向がうかがえる。このような傾向は、米国の結果でも認められるものであり、Rubenstein の結果とも一致するものである。Ainsworth や Bell は group C に分類される子どもは、母子の相互交渉を通して、母親の行動予測を確立していないために、ものに対して、人に対しても安定した関係をもつこと

ができないと指摘している。確かに、group C に分類される子どもは、Strange Situation において玩具に対して積極的興味を示さないのが特徴的行動である。

Ⅲ コンピテンスと他の要因との関連

1. コンピテンスと養育環境：コンピテンスの発達には、子どもに与えられる刺激の種類と量の豊かさが関係することが、Yarrow ら、Elardo ら、Caldwell らによって指摘されている。また、先に行なった米国の結果においても、コンピテンスの測定として使用した Bell and Pairs テストの得点の高い子どもは、その養育環境に社会的、物理的刺激が豊かに用意されているを見いだしている。

TABLE 7

HOME, BELL AND PAIRS TEST SCORES
CORRELATIONS (N=43)

HOME	Exploration (Bell Test)	Preference for Novelty (Pairs Test)
1.	.22	.27
2.	.21	-.19
3.	-.01	-.02
4.	-.12	.19
5.	.21	.22
6.	-.19	-.10
Total	-.03	.15

TABLE 7 は、Bell and Pairs テストと HOME の関連についてみたいものである。

いずれにおいても、両測度の間には有意な相関は認められない。しかし、Pairs テストと尺度 1 の間には比較的高い相関が認められる ($p < 0.1$)。

先にも述べたように、米国の結果では、Pairs テストと下位尺度 4 および 6 の間にそれぞれ有意な相関が見いだされている。

このような日米差は、日本の子どものコンピテンスの発達には、単なる刺激の量あるいは種類というような物理的な条件よりも、むしろ、母親とのかかわりあいそのものが、重要な意味をもつことを示唆しているものといえよう。すなわち、日本の子どものコンピテンスの発達には、情緒的要因が非常に重要な意味をもつことを示している。

それ故、日本と米国において、コンピテンスの発達を考える場合、異なった要因について考慮する必要があるといえる。

2. コンピテンスと母親の養育態度：上の結果から示変されたコンピテンスの発達と母親の養育態度の関係についてみたのがTABLE 8 である。

TABLE 8 は、Bell and Pairs テストと母親の養育態

TABLE 8
CORRELATIONS BETWEEN BELL AND
PAIRS SCORES AND AINSWORTH SCALES (N=43)

Ainsworth Scale	Bell	Pairs
Sensitivity	-.06	.28
Acceptance	-.04	.22
Cooperation	-.10	.01
Accessibility	-.11	.24

TABLE 9 CORRELATIONS BETWEEN HOME AND AINSWORTH SCALES (N=43)

HOME	Sensitivity	Acceptance	Cooperation	Accessibility
1	.48**	.46**	.45**	.45**
2	-.09	.16	.15	-.11
3	.24	.10	.23	.23
4	.37*	.35*	.30*	.52***
5	.42**	.23	.35*	.38*
6	.22	.21	.33*	.29
Total	.50***	.46**	.53***	.54***

* $p < .05$

** $p < .01$

*** $p < .001$

度の測度である Ainsworth Scale の関連についてみたものである。両測度の間には、5%水準で有意な相関は見いだされていない。しかし、Pairs テストと尺度 1 および 4 の間には比較的高い相関が認められる ($p < 0.1$)。

尺度 1 の得点の高い母親とは、子どもの行動の意味を正しく解釈し、速やかにかつ適切な反応のできるものである。また尺度 4 の得点の高い母親とは、子どもへの関心が高く、子どもとの物理的な距離をあけないようにして、常に、子どもの行動を知覚可能な範囲に母親の位置をおこうとする態度の明確なものである。両尺度得点の高い母親の行動は、子どもの側からみると、共に反応の速度が速いという点で類似している。しかし、尺度 1 では、反応の速さとその反応の適切さが問題とされる。一方、尺度 4 では、反応の速さそのものが問題とされ、その反応の適切さは問題とされない。このように両尺度で測られる母親の養育態度は、基本的に異なっているものである。

子どもの側から考えるならば、尺度 1 で高い得点の母親をもつということは、自分の行動に対して高い満足感を経験することになる。また尺度 4 で高い得点の母親をもつということは、子どもは、結果的に多くの刺激量を経験していることになる。このように、尺度 1 の得点の高い母親をもつ子どもと、尺度 4 の得点の高い母親をもつ子どもでは、子どもの側からみるとそれぞれ異なった経験をしていることになる。

これら 2 つの尺度と Pairs テストが比較的高い相関をもつということは、日本の子どものコンピテンスの発達には、単に刺激量が関係するのではなく、満足感という情緒的な体験が意味をもつことを示しているものといえよう。

一方、米国の結果では、Bell テストと尺度 4 の間に有

意な相関が認められている。先にも指摘したように、米国にあっては、母親の養育態度においてもやはり、刺激の量の多さということがコンピテンスの発達に関係しており、日本とは異なった様相を示している。

IV 養育環境と母親の養育態度

養育環境の重要な要因の1つとして、母親の存在そのものがある。それ故、子どものおかれている養育環境を測定する HOME と母親の養育態度を測定する Ainsworth Scale との間には、多くの有意な相関が仮定される。特に、HOME の下位尺度 1, 2, 5 は、母親が具体的に子どもにどうかかわったかについてみる尺度であるため高い相関が考えられる。

TABLE 9 は、HOME と Ainsworth Scale の相関をみたものである。

先に仮定したように、下位尺度 1 および 5 と Ainsworth Scale の間に有意な相関が認められる。しかし、下位尺度 2 との間には全く有意な相関は認められない。この他、有意な相関が認められるのは、下位尺度 4 と Ainsworth Scale の全尺度および下位尺度 6 (Opportunities for Variety in Daily Stimulation) と Ainsworth Scale の尺度 3 との間である。

米国の結果では、HOME の下位尺度 2 および 5 が Ainsworth Scale のすべての尺度と有意な相関を示している。日本の結果と比較すると、下位尺度 5 については同じ結果である。しかし、下位尺度 1 と 2 の結果は、日米で異なっている。また、日本の結果では、下位尺度 4 と Ainsworth Scale のすべての間に有意な相関が認められるのに対して、米国では、Ainsworth Scale の尺度 3 の間のみ有意な相関が認められるにすぎない。逆に下位尺度 6 は、米国の結果では Ainsworth Scale の 1, 2, 3 の尺度の間に有意な相関が認められるのに対して、日本では Ainsworth Scale の尺度 3 との間に有意な相関が認められるにすぎない。

このように、HOME と Ainsworth Scale の間には多くの有意な相関が認められるものの、有意な相関が認められる尺度間の関係は、日米において異なっているものが多い。

米国の結果については、手続上の問題として、先に行なった HOME の結果が Ainsworth Scale の評定におよぼす Halo effect の問題を指摘した。日本の結果においても、やはりこの問題は指摘する必要があるだろう。

しかしながら、ここに見いだされた日本と米国の差異

についてはさらに検討する必要がある。

討 論

I 被験者の問題

被験者決定の手続は、先に方法の所で述べた通りである。依頼方法によって研究への協力率が非常に異なる。郵送依頼よりも口頭依頼の方が、協力率は高い。しかし、長期間に亘る研究期間内における目減り率は、口頭依頼の方が高く、本研究期間である9ヶ月間における目減り率は約40%である。郵送依頼による目減り率は約5%である。

また、本研究期間における目減り率は、協力者の住宅地域によっても異なっている。団地在住者の目減り率は、約7%であり、他地域在住者の目減り率は約24%である。なお、被験者全体の本研究期間である9ヶ月間の目減り率は約17%である。

さらに、被験児の性別によって研究協力者数をみると、男児33名に対して女児19名である。9ヶ月間における目減り率は男児約18%、女児約16%とほぼ等しい。女児よりも男児をもつ家庭が多く協力を申し出てくれているが、研究協力依頼名簿の上での男女児数は、ほぼ同数である。このような性別による協力者数の違いは、親の育児における関心が男児をもつか、女児をもつかによって違っていることを示すものと思われる。

長期間に亘る継続研究の最も大きな問題は、被験者の目減り率をいかに少なくするかという問題である。本研究の計画を立てる段階で、古沢頼雄氏から3年間の継続研究をするのであれば「初年度の必要被験者数は、最終年度で必要とする人数の3倍を確保する必要があること、さらに被験者との人間関係を継続するための具体的な活動が必要である」との2点について助言を得ている。

しかしながら、個人研究にともなう時間的、経済的諸事情によって十分に古沢氏からの助言を活すことができないままに、被験者数も最終必要数の1.5倍で研究を開始する。また、研究期間中の被験者との関係保持も、協力時の謝礼と協力後の礼状および協力時のスナップ写真の送付、さらに被験者からの育児相談に応ずる程度にすぎない。

にもかかわらず、非常に少ない目減り率で研究が継続できた最も大きな要因は、協力者の研究に対する関心の強さにあったものと思われる。協力者の主な動機は“(誕生)記念に”、“おもしろそう”、“育児相談の相手として”というものである。協力者の研究への関心の強さは、実

験場面である Strange Situation に参加するために来校する様子にも認められる。被験者のほとんどの母子とともに、直接研究対象ではない父親も参加しており、時には祖父母が参加したケースも数例ある。

このような被験者に共通する“研究協力への関心の高さ”が、本研究で用いた測度に大きな影響を与えていることが考えられる。特に、養育環境をみる HOME および母親の養育態度をみる Ainsworth Scale に片寄りを生じさせていることが考えられる。このような影響を最少限におさえる方法の1つは、できるだけ研究期間を長くすることではないかと考えている。その点から見ると、本研究で用いた9ヶ月間という時間は、母親の関心の深さを捨象するには、短かすぎたように思われる。

II 日米差

日米間において見いだされた差異はつぎのようなものである。

米国の一才児がおかている養育環境は、日本の一才児に比較して、社会的、物理的の刺激の種類および量が豊富である。母親の養育態度については、米国の母親は、子どもに対してより意図的、指示的で、母親中心である。一方、日本の母親は、子どもの行動や意志を尊重し、直接的な指示を与えることよりも、その場の雰囲気を変えることで間接的に子どもの行動をコントロールする傾向が強く、子ども中心といえることができる。このような日米間の母親の養育態度の差異は、男児をもつ母親の間に顕著であるのに対して、女児をもつ母親の間には認められない。

母親に対して形成している愛着についてみると、米国の一才児は、母親を avoid するものが日本の一才児よりも多い。一方、日本の一才児は、母親に対して ambivalent な愛着を形成しているものが多い。

養育環境、母親の養育態度、コンピテンス、愛着の四要因の関連についても日米差が認められる。養育環境と母親の養育態度の間には、日米ともに非常に多くの有意な相関が見いだされている。しかしながら、有意な相関が見いだされる尺度は、日米間でかなり異なっている。これは、養育環境も母親の養育態度もともに社会の価値体系を反映するものであるためと考えられる。

また、母親の養育態度と愛着の形成との関連については、米国の場合は、子どもに対する関心が低い母親をもつ子どもは、母親に対して ambivalent な愛着を形成することが見いだされている。しかし、日本の場合には、

そのような直接的な関連は見いだされていない。

コンピテンスの発達に関しては、米国の場合は、子どもに与えられる刺激量と種類が大きな意味をもっている。しかし、日本の場合には、そのような有意な相関は認められない。日本と米国の一才児のコンピテンスの発達についてみると、米国の一才児の方が日本の一才児よりも優れている。確かに、一才児に与えられる刺激の量と種類についてみると、米国の子どもは、日本の子どもよりもより多くの刺激をその生活環境の中で受けている。それ故、刺激の量・種類とコンピテンスの発達の関連性は、文化・社会の違いを超えて存在するかのように思われる。

しかしながら、日本の一才児についてみると、コンピテンスの発達は、刺激の量や種類の豊かさよりも、むしろ母親との関係で体験する満足感と関連する傾向が示されている。このような日本の結果は、米国のように刺激の量や種類が豊かになった状況にあっても意味のある関連なのであろうか、はたして、コンピテンスの発達によって適正な刺激の量や種類というものは存在するのであろうか。

このような問題に関しては、子どもとものとの関係のあり方についてみる必要がある。

本来、子どもの存在は、受身的な存在としてとらえることよりも、むしろ自ら成長する力を内にもつ能動的な存在としてとらえる必要がある。確かに、子どもの行動は、子どもに与えられる刺激と子どもとのかかわり合いを通して生じる。その意味で、環境を豊かにすることは、非常に大きな意味をもつ。しかしながら、子どもの存在を能動的な存在と考えるならば、刺激の豊かさだけを問うことでは不十分であろう。子どもがものとうかかわるか、ものを自己の中にどうとり入れているかということが問われなければならない。このような視点を欠いた場合には、子どもの存在もまたコンピテンスも非常に static な存在ととらえてしまう危険がある。その意味で子どもの視点から刺激そのものの意味についてさらに詳細に問う必要がある。

謝 辞

本研究は3年間に亘る研究の一部をまとめたものである。本研究に協力していただいた被験児と母親の皆様から感謝を申し上げます。

また研究資料の収集にあたって下さいました東京家政大学児童学科小児医学研究室的の若草グループの指導

員である芝辻益子さん、上野巳美子さんそして Strange Situation の Stranger およびビデオ撮影にあたって下さいました東京家政大学児童学科の金森初恵さん、丹下めぐみさん、横川邦子さんに心から感謝を申し上げます。

文 献

- 1) 東 洋, 柏木恵子, R. D. Hess : 母親の態度・行動と子どもの知的発達—日米比較研究— 東京大学出版会 東京 1981
- 2) A. Sroufe : *Knowing and Enjoying Your Baby*. Prentice Hall, Englewood Cliffs, New Jersey, 1977
- 3) B. Caldwell, J. Heider, and B. Kaplan : *Home Observation for Measurement of the Environment*. A Paper Presented at the Meeting of the American Psychological Association, New York, September, 1966
- 4) D. Baumrind, and A. Black : *Socialization Practices Associated with Dimensions of Competence in Preschool Boys and Girls*. *Child Development*, **38**, 291—327 (1967)
- 5) D. B. Connell : *Individual Differences in Infant Attachment Behavior : Relations to Response to Redundant and Novel Stimuli*, Unpublished Masters Thesis, Syracuse University, 1974.
- 6) 福本俊, 内田純子 : 認知的発達に関する研究, 発達初期における母子交互性に関する縦断的研究, 40 -109(1980)
- 7) J. Rubenstein : *Maternal Attentiveness and Subsequent Exploratory Behavior in the Infant*. *Child Development*, **38**, 1089—1100 (1967)
- 8) K. A. Clarke-Stewart : *Interactions between Mothers and Their Young Children : Characteristics and Consequences*. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **38**, (serial No. 153), (1973)
- 9) K. Takahashi : *Attachment Behaviors to a Female Stranger among Japanese Two-Year-Olds*, *Journal of Genetic Psychology*, **140**, 299—307 (1982)
- 10) 古沢頼雄, 石井富美子, 藤崎真知代 : 母子交互性に関する研究, 発達初期における母子交互性に関する縦断断的研究, 2-27(1980)
- 11) L. Yarrow, J. L. Rubenstein, F. Pedersen, and J. Janowski : *Dimensions of Early Stimulation and Their Differential Effects on Infant Development*. *Merrill-Palmer Quarterly*, **17**, 205—219 (1971)
- 12) L. Yarrow, R. Kein, S. Lomonoco, and G. Morgan : *Cognitive and Motivational Development in Early Childhood*. In O. Z. Friedlander, G. M. Sterritt and G. Kirk (Eds.), *Exceptional Infant*, 3, Brunner/Mazel, New York, 1975.
- 13) M. D. S. Ainsworth : *Infancy in Uganda : Infant Care and the Growth of Love*, Johns Hopkins Press, Baltimore, 1967
- 14) M. D. S. Ainsworth, and B. S. Wittig : *Attachment and Exploratory Behavior of One-Year-Olds in a Strange Situation*. In B. M. Foss (Ed.), *Determinants of Infant Behavior*, IV., Methuen, London, 1969
- 15) M. D. S. Ainsworth, M. C. Blehar, E. Waters, and S. Wall : *Patterns of Attachment : a Psychological Study of the Strange Situation*, Lawrence Erlbaum Assoc., Hillsdale, New Jersey, 1978.
- 16) M. D. S. Ainsworth, and S. M. Bell : *Mother-Infant Interaction and the Development of Competence*. In K. Connolly and J. Bruner (Eds.) *The Growth of Competence*, Academic Press, New York, 1974
- 17) M. D. S. Ainsworth, S. M. Bell, and D. J. Stayton : *Individual Differences in the Strange Situation Behavior of One-Year-Olds*. In H. R. Schaffer (Ed.) *The Origins of Human Social Relations*, Academic Press, London, 1971.
- 18) M. D. S. Ainsworth, S. M. Bell, and D. J. Stayton : *Infant-Mother Attachment and Social Development : Socialization as a Product of Reciprocal Responsiveness to Signals*. In M. P. M. Richards (Ed.), *The Integration of a child into a Social World*, Cambridge University Press, London, 1974.
- 19) M. Lewis, and S. Goldberg : *Perceptual-Cognitive Development in Infancy : a Generalized Expectancy Model as a Function of Mother-Infant Interaction*. *Merrill-Palmer Quarterly*, **15**, 81—100 (1969)

- 20) M. Main : Exploration, Play, and Cognitive Functioning as Related to Child-Mother Attachment, Unpublished Doctoral Dissertation, Johns Hopkins University, 1973.
- 21) 三宅なほみ, 東 洋 : 母親のコミュニケーションスタイルとその子供の認知発達に及ぼす影響—図形伝達課題における日米比較—, 教育心理学研究, **27**, 2, 75—83 (1979)
- 22) N. Bayley, and E. S. Schaefer : Correlations of Maternal and Child Behaviors with the Development of Mental Abilities : Data from the Berkeley Growth study. Monographs of the Society for Research in Child Development, **29**, (serial No. 97) (1964)
- 23) 大瀧ミドリ : 愛着・コンピテンス・母子関係—理論的概観, 東京家政大学研究紀要, 第**20**集(1), 11—21 (1980)
- 24) 大瀧ミドリ : 乳児期の養育環境とコンピテンスについて, 東京家政大学研究紀要, 第**21**集(1), 19—28 (1981)
- 25) 大瀧ミドリ : 日米における親子関係の比較研究, 児童研究, **60**, 7—14 (1981)
- 26) 大瀧ミドリ : 乳児期における愛着の形成とコンピテンスについて, 東京家政大学研究紀要, 第**22**集(1), 39—51 (1982)
- 27) R. A. Thompson, M. E. Lamb, and D. Estes : Stability of Infant-Mother Attachment and Its Relationship to Changing Life Circumstances in an Unselected Middle-Class Sample, Child Development, **53**, 144—148 (1982)
- 28) R. Bradley, and B. Caldwell : Early Home Environment and Changes in Mental Test Performance in Children from 6—36 Months. Developmental Psychology, **12**, 93—97 (1976a)
- 29) R. Elardo, R. Bradley, and B. Caldwell : The Relation of Infants' Home Environments to Mental Test Performance from 6—36 Months : a Longitudinal Analysis, Child Development, **46**, 71—76 (1975)
- 30) S. Goldberg : Social Competence in Infancy. Merrill-Palmer Quarterly, **23**, 163—177 (1977)
- 31) S. M. Bell : The Development of the Concept of Object as Related to Infant-Mother Attachment. Child Development, **41**, 291—311 (1970) 31)
- 32) 千石 保 : 変ってきた赤ちゃん—三ヶ月児の日米比較(1)~(4)読売新聞, 1981.
- 33) 高橋道子・石井富美子 : 社会性の発達に関する研究, 発達初期における母子交互性に関する縦断的研究, 28—39 (1980)
- 34) W. Caudill, and C. Schooler : Child Behavior and Child Rearing in Japan and the United States : an Interim Report. Journal of Nervous and Mental Disease, **157**, 323—338 (1973)
- 35) W. Caudill, and H. Weinstein : Maternal Care and Infant Behavior in Japan and America. Psychiatry, **32**, 12—43 (1969)